

自著と
その周辺

たのしく読めて、すぐわかる 臨床神経解剖

翻訳 岡元和文

総合医学社

112頁

2008年

定価 1,800円

出版社の社長さんから“神経解剖は難しいですね”“難解な神経解剖を分かりやすく翻訳して頂けませんか”という依頼で専門家でない私があえて翻訳することになり、この本が生まれました。結局、“たのしく読めて、すぐわかる 臨床神経解剖”というタイトルのこの本の翻訳に毎週土曜の夜をつぶして約1年かかりました。

目次は、神経構造の概要、血液供給、髄膜、髄液、脊髄、脳幹、視覚系、自律神経系と視床下部、小脳、基底核、視床、大脳皮質、臨床レビュー、小解剖図、用語解説からなります。

この本に“私が若い頃出会っていたら私の専門は変わっていたかもしれません”と言いたくなるほど、この本はとてつもなく楽しく神経解剖が学べる本です。昔、学生時代に神経解剖という言葉を知ると、“難しい”という印象が強く、暗く憂鬱な気分になったことを思い出します。このために、神経内科や脳神経外科を嫌いになった人も少なくないと思います。

実は、私もその一人です。卒業後に神経内科や脳神経外科に入局した友人達を、“よく難しい神経解剖が必要な講座に入局する勇気があるな”と尊敬のまなざしでみたものです。この本のように、神経内科や脳神経外科の原点ともいべきやさしく学べる神経解剖の本が学生時代や研修医時代にあったらと心の底から思います。

救急診療では、初期・2次・3次救急診療を介して、(1)多様で多彩な疾患を診る魅力、(2)最初に診る・最初に診断する魅力、(3)種々の救急処置を学ぶ魅力、(4)救急蘇生チームのメンバーとしての魅力、(5)先輩医師から人間を学ぶ魅力、(6)興味ある症例を経験しレポートする魅力、(7)集中治療で重症患者さんを救命する魅力を味わうことができます。

この本は、脳神経疾患と脳神経外傷に関して、上記の(2)を満足させてくれるでしょう。この本を読めばERで救急患者を診ながらCTやMR画像を推察する楽しみが味わえます。ER診療が楽しくなります。

また、本書は、米国では医学生が医師免許試験前に読むことで有名な本のようなようです。前長野県立こども病院長の宮坂勝之先生が翻訳されたエレン・ロスマン筆のハーバード医学校(西村書店、2005年)の103頁には“彼らの目に入った光景は、服を着たまま浴槽の中で……を読んでいる”とこの本を紹介されています。そして、ハーバード医学校の本の中の注釈で、この本はよく読まれている学生向けの神経解剖の参考書であると紹介されています。

また、米国では、この本はファミリー医科医・総合内科医にも座右の書として利用されているようです。もちろん、神経内科や脳神経外科などの神経解剖の専門家、全ての内科系や外科系の勤務医の先生にも役立つでしょう。

翻訳に際しては、“難しいことはやさしく、やさしいことは更に分かりやすく”という意図を込めて訳しました。また、以下の点を訳者として工夫しました。

第一に、難しい神経解剖をわかり易く表現するために口語訳とし、大切な用語は太字としました。第二に、神経解剖の漢字は初心者には読めない漢字が少なくありません。そこで、難しい漢字にはフリガナをつけました。例：輻輳(ふくそう)。第三に、神経解剖の用語には難解なものが少なくありません。難解な用語には訳注を入れました。例：輻輳(近くを見るときに視線が内側に向かうこと)。第四に、神経解剖図は上下、前後、左右が理解できないことが少なくありません。上下、前後、左右の方位を全ての神経解剖図に加えました。

私は、この“たのしく読めて、すぐわかる 臨床神経解剖”の本は、学生、研修医、総合診療医、救急科医、全ての内科系や外科系の医師だけでなく、クリニックを開業しているホームドクターにも役立つと自信を持ってお勧めします。

先日、ある神経内科の専門家から、この“たのしく読めて、すぐわかる 臨床神経解剖”の本を学生教育に利用していますといううれしい話も届きました。苦勞して翻訳してよかったと思った次第です。

この“たのしく読めて、すぐわかる 臨床神経解剖”の本を一人でも多くの医師、学生、看護師さんが楽しみ、座右の書として頂くことで、脳神経疾患や脳神経外傷などの患者さんを的確に診断し、治療に活用されることを祈念しています。

(信州大学医学部救急集中治療医学講座 岡元 和文)